

農具等の名称に関して

川 原 嘉久治

1 はじめに

集落遺跡等に出土する遺物類は、それが置かれた時代の真実の姿を伝えている。故に遺物に冠する名称には、その性格・時代性に適切な表現が望まれるもので、時代に適応する名称は慎重に配慮されるべきであろう。

新保遺跡出土資料の整理にかかわった筆者は、この遺跡出土の木製品についての名称付与に関心を深くしていたが、日本における農具類の名称・用語が中国最初の字典『説文解字』に示される解釈を基礎としており、それに本来は和名として定着していた名称を適合させたことにより音訓混同の傾向が強く見られるようになってきている。このことが用語上における思想対比を試みるべきではないかという感を強く抱くようにいった主な理由である。

遺物類は、当該年代を正確に証明する有力なものであるが、その名称もまた時代適応の呼称でなければならない。たとえ一点の木製品と雖も時代不相応な呼称用語で表わされることは、歴史解明の追求手段の一部を忌避することにも繋がりがかねないものと考えられる。

本稿は、そうした観点から、古代～近世における典籍史料を基に、農具等の名称のあり方について検討を行ったものである。

2 文献について

農具等の名称問題については、過去数多くの研究者が取り組んでいる。すなわち考古学の側から遺物の形態を質し、さらに発展させて名称をアプローチした論文や研究史も少なくないが、古典籍を中心とする追求を試みた理由から、先達の業績である諸論文・研究史等については、後述の参考文献以外は、本稿の脱稿時においては未見である。



第1図 漢の牛耕図
(山西平陸漢墓の画像石)

(天野元之助「中国におけるスキの発達」『東方学報』第26冊・1956)

故に、考察に向け本稿に使用した農具名称及び、そのほかの名称は、日本・中国・韓国の漢字文化圏による古典籍及びそのほかの史料によったものである。

各史料により引き出した個有名義は、それぞれに掲載されている同一名称を中心として、さらに同義文字

	屨・藤阿志加太（無齒）。屨・跂阿志加太又木久豆（有齒）。梯波志。 砧加奈支乃石。砧加奈支乃石。杵支称。極木乃末太。
『延喜式』日本（927）	スキ クワ クワ イムクワ イムスキ クワ ツキウス カラウム キメタ 鉏。鑿。鉏。齋鉏・齋鋤（祭祀用語）。鑿。舂。碓。臼。杵。砧。 カラスキ スキ スキ 槌。辛鉏。鑿。鉏。箕。
『倭名類聚抄』日本（937） （和名抄）	鋤須支。鋤須支。鑿久波。鑿久波。臼字須。碓加良字須。碓須利字数。杵古 須支。杵江布利。連枷加良佐手。杵昌与反。鑿漢語抄。箕美。權佐良比。 馬杷字麻久波。砧岐沼以太。砧岐沼以太。砧岐沼以太。屨阿志太。和唐韻云犁 齒。和名加良 須支。梯加介波志。搗衣杵都知。杈極末太布利。
『伊呂波字類抄』日本（1180）	スキ スキ スキ スキ カラスキ ウシワタ クワ クワ ウス カラウス スリウス キネ キ 耒。耒。鋤又鋤。鉏鉏。犁。犁。鑿。鑿。臼。碓。碓。杵（舂 槌）。權。杷。杵亦作杷木耒也。馬杷。槌。砧。碓。碓。屨。屨屨。 ホ サラヒ エフリ コスキ ムマクワ ツチ キヌイタ キヌイタ キヌイタ アシダ フツケノアシダ ミ テツカサハ カケハシ カラスキ カラスキノサキ カナフゲン イウ 箕。把。梯。耒耒。耒鑿。鑿。耒豆知和利。
『皇大神宮年中行事』日本（1192）	手鉏。大足（鉏山伊賀利神事）。
『東国正韻』韓国（1447）	耒耒。耒。鉏。鋤。鉏。鑿。鑿。鑿。鑿。舂。臼。砧。碓。碓。杵。 碓。杵。杷。犁。枷。杈。梯。屨屨。杵。槌。
『節用集』日本（15世紀末頃）	スキ スキ スキ スキ クワ サライ カラスキ コスキ カラウス キネ キヌイタ キヌイタ カケハシ フ 耒。耒。鉏。鋤。鉏。擢。犁。杵。碓。杵。砧。碓。梯。土 グキ 堀子。
『訓蒙字會』韓国（1527）	サボリ サボンア ホミシヨ ホミ ホミ ホミグイ ビョダ コチョ ハンア ホワク ベマア ミルルニョン ベウ コチョ 耒。耒。鋤。鑿。鑿。鉏。鉏。杵。碓。臼。磨。碾。碓。杵。 ボトン ボトン ボレエ サルバ ソホレバサルナヨ キグ テウリデキヨッチ 砧。碓。犁。杷。鑿。箕。梯。復。
『天工開物』中国（1637）	ライシ シ ショウ ジョウ リウ サウ カ タイ キュウ ショウ テン リョウ ショ 耒耒。耒。鋤。鋤鋤。犁。插。枷。碓。臼。舂。碾。磨。杵。 タイ キ パ アバ タイバ 槌。箕。杷。磨杷。釘杷。
『倭語類解』朝鮮（17～18世紀）	耒 ^{カレエ} すき。鋤 ^{カレエ} すき。鋤 ^{ホミ} くさと。犁 ^{カレエ} ^{ボシブリ} からすき。耒 ^{トリケガ} いねうち。杵 ^{カレホム} こすき。碓 ^{カレホム} ^{パンアデエ} からうす。臼 ^{チヨルグ} つきうす。砧 ^{タテミイトルチム} きぬ た。木槌 ^{ボクテイ} きぬたたき。杵 ^{チヨルグコンイシヨ} きぬ。箕 ^キ み。 梯 ^{サタリジエ} かけはし。
『倭漢三才図会』日本（1713）	耒 ^{からすき} 和名音離。鋤 ^{カレエ} 音助。鉏同字。鑿音竹。和名須支。今云夕波。鑿音華。 和名加良須支。鋤 ^{カレエ} 鑿（丘轉切）。錯（斫）。魯（斫）。斲音竹。 鉏音悄。鑿同。鑿同。劇同。鑿、音卓。杵 ^{カレホム} 木重。杵 ^{カレホム} 馬齒杷・馬 車（測治反）。鉏同。和名久波、今云須木。杵 ^{カレホム} 和名古須岐。杵 ^{カレホム} 杷和名字麻 久。杷音龍。渠疏、渠杼。鑿音渠。和名佐良比。杷（俗杷音八・捌。からさお 波。和名古麻佐良閉。鑿云古豆波。穀杷透齒之波。和名江布利。連枷 枷・音翼。拂音弗。からすき音對。和名音位。鑿音龍。破音砌。益。益。 杷・音季。和名加良佐手。和名音須。和名音須。碓和名須利字数。俗唐磨。 磨同。ヒキウス音求、音處。音對。枯同。磨同。磨同。磨同。磨同。 磨俗云。掄。碓。和名字須。杵和名岐。砧和名岐沼以太。俗云岐沼太。 搗衣杵俗云之古呂。杈和名末太布利。箕和名同字。和名美。梯波志。今云波志古 波志。屨音極・屨。和名阿志太。 足下の訓中略。俗云下踏（ゲタ）。

附記

『淮南子』耒耨 説文余註「摩田器布種後以此器摩之使土開發處復合覆種也。」鑿插（大すき）。

(2) 『説文解字』 梯^{フツ}(連枷・からさお)。枡^{サン}(杓・こすき)。『韓非子』 鈎梯(鍵の付いた縄のはしご)。『日本書紀』 鋤(鉄を表現)。礪^{テン}礪(礪・米を搗く。礪^{ガイ}・麦をひく)。『倭名類聚鈔』 鍤・鑿・鏹^{クワ}・鏹^{クワ}(大すき)。『天工開物』 磨^マ粳^バ(ならしぐわ)。

4 農具等名称に関する問題

(1) ^{ライシ}来来呂

農耕用器具の名称として史料上先行するのは耒耜^{ライシ}であろうか。中国の甲骨文字にみる耒^{ライ}という文字の原形は、木を採めて作った三また棒や、二また棒に足で踏む横木を付けた「市・耒⁽²⁾」形の耕具を表わしている。また呂の原形としては「𠂔」形の曲棒で示されている。『周易』「繫辭伝下」に、

「神農氏作。斲木為耜、揉木為耒、耒耨之利、以教天下……。」

とあるといはれ、また『淮南子』⁽¹⁾「汜論訓」には

「古者剡耜而耕、磨蜃而耨、木鉤而樵、抱耨而汲、民勞而利薄。後世爲之 耒耜耨鉏、斧柯而樵、桔槔而汲、民逸而利多焉」

がみえる。これはその器形から初期の耕作具とする耒・耜などの製法の一面と、その効用を示すものである。加えて『淮南子』は、木器に替わる利器すなわち鉄の刃を付けたスギや、クワなどの出現も明らかにしている。

甲骨文字によると、耒耜の字句は、本来個別の語意を有していたことが明らかである。しかし⁽²⁾『説文解字』の殷註に「耒、耒下耒也。耒、耜上句木なり。」とみられることなどから、耒はス・キの柄の部分を表現する名称となり、耜は耒に変化をして、ス・キの先端に付けた鉄の刃の部分に対する名称となった。一体化した耒耜は、その使用形態から手唐鋤・踏唐鋤などとも称されている。⁽¹¹⁾『伊呂波字類抄』は、耒・耜・耒耜に⁽¹⁸⁾註し、⁽¹⁸⁾『倭漢三才図会』には、⁽¹⁸⁾耒耜^{からすき}和名加良須支。の註がある。なお文中における⁽¹¹⁾耒耜は、⁽¹¹⁾『伊呂波字類抄』の⁽¹⁸⁾耒^{タ子カス}田器世。及び、⁽¹⁸⁾『倭漢三才図会』の云う⁽¹⁸⁾耒^{音憂}木^{音憂}所^{音憂}俗云豆知知利。がそれである。

(2) ^{カラスキ}来^{カラスキ}来から犁へ

手耕具の耒耜に対する犁は牛耕に係の深い文字である。中国における牛耕の起ころは、遠く東周の時代にまで遡るようだ。戦国、漢の時代(図一1)にはかなりの普及も進んでいたようだ。

大型で、鋭利な刃を付けたスキを犁^{レイ}と云い、それを引く牛を犁^リと称すると



第2図 踏み臼の図
(25)
安岳3号墳壁画

云われている。『玉篇』は「犁・耕具也。」と註する。『音義』の「犁 犁力牛反。」と合わせて、牛耕に起因した名称が判然とする。さらに『正韻』に「犁亦作犁。」とあり、犁は犁の異体字であると解いている。

日本における犁・犁の文字使用の状況は勿論これに準じている。『新撰字鏡』には、犁加良須岐牛。⁽⁸⁾『倭名類聚抄』は、犁加良須岐。⁽¹⁰⁾『伊呂波字類抄』では、犁カラスキ・犁ウシクワと載せている。犁加良須岐牛は異例であるが、牛・馬耕の日本普及の事実を示す文字でもあろう。

(3) 鋤と鋤と・鋤と鋤

中国における鋤と鋤の名称は、日本のそれとは正反対である。その相違する両者の名称すなわち鋤と鋤は現在の呼称でもあるが、この誤称の原因は、伝来時点においてすでに誤っていたものか、或は文字到来後の普及時において誤りを生じたなどの二点が考えられている。本項においては、原初とする鋤と鋤の文字を探り、その追究によって、相互誤称の経過を辿ることとする。

(イ) 鋤について

『説文解字』によると「鋤立礪所用也」とある。また「鋤 大鋤也」⁽²⁾とも註している。一方『釋文』には「鋤本又作鋤」と註し、鋤・鋤は鋤と同義の字意として解いている。これにより鋤は、地を研る器具の名称であることが判るし、その用途からみると、現在称するところの鋤であることに間違いあるまい。

(ロ) 鋤・鋤について

鋤は鋤とも書くが、これは『集韻』にみる「鋤亦書作鋤」の註釈によるまでもあるまい。鋤の文字については『玉篇』に「鋤也」⁽²⁾と註することで、『説文解字』の云う「鋤 詳里切垂也」に通ずるが、『釋文』に「鋤挿也、挿地起土也。鋤 鋤也、鋤地為坎也」とみえる。これは前出鋤の項の除草具鋤に対して、鋤（現在の鋤）の用途は、鋤田にあることを示すものであろう。

以上の内容を中心にして、鋤と鋤より、鋤から鋤への名称の変遷を表一により求めるとつぎのようになる。

(ハ) 鋤と鋤の名称の移り替り

鋤(1)―鋤(2)―鋤(3)―鋤(4)―鋤(8)―鋤(9)―鋤(10)―鋤(24)―鋤(11)―鋤(14)―鋤(18)……鋤
鋤(1)―鋤(2)―鋤(4)―鋤(8)―鋤(9)―鋤(10)―鋤(24)―鋤(11)―鋤(14)―鋤(18)……鋤
鋤(1)―鋤(2)―鋤(4)―鋤(8)―鋤(9)―鋤(10)―鋤(24)―鋤(11)―鋤(14)―鋤(18)……鋤

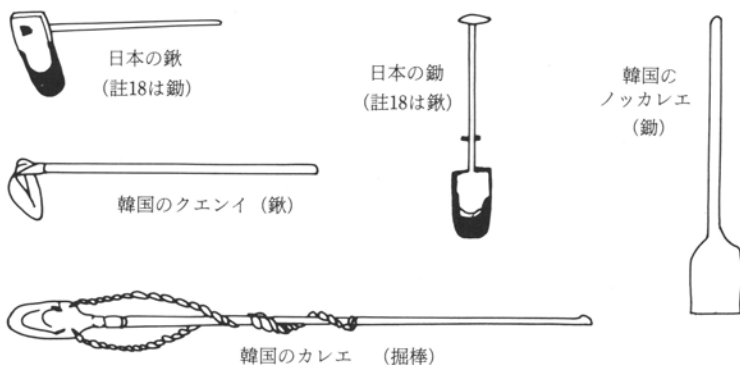
まず、現代における鋤とする文字すなわち正字の鋤の意を持つ鋤(8)で中断し、鋤・鋤となり、(24)でまた鋤となる。これに対してスキを表わす鋤の文字は、同(8)の所載では鋤・鋤に変化をしている。しかし鋤・鋤の両者の変転は『新撰字鏡』よりさらに遡るものと考えられる。

『日本書記』には、鋤・鋤などの文字が使用されているが、仁徳天皇30年の条による、許久波を木鋤と註してある。さらに、鉄製を表現する方法として、鋤・鋤などと用いられており、かなり混沌とした使用状況を呈し、実状の把握は困難であるが、平安初期の『新撰字鏡』以降は、こ

の相互呼称名が入れ替って定着したことは事実である。(24) の鋤²⁷は実用呼称とは考え難い。

降って17～18世紀の朝鮮半島において『倭語類解』が編纂され、多くの農具名も記載されている。それによる鋤は「鋤^{スミ}ホミ^(カレエ)くさと⁽²⁾り」と音訳されていることは注目に値しよう。この「くさと⁽²⁾り」は云うまでもなく、『説文解字』にみる「鋤⁽²⁾立^ハ埴^{クサキルニル}所用也」に当るものである。しかし平安時代以降の鋤^{スミ}に対する名称及びその器形からは、「くさと⁽²⁾り」とする解釈は当を得ないように考えられるが、『倭語類解』の云う「鋤⁽¹⁷⁾—くさと⁽²⁾り」は、朝鮮半島に持ち込まれた日本鍬（第3図）を対象とする呼称であって、云いかえれば、原典の名称へ戻った上での解釈により付されたものであろうと考えられる。

17～18世紀にあつて、鋤・鍬の名称を原典の鍬・鋤に復そうとする傾向は、実は、当時わが国の学者等の間においておこなわれていたのである。『倭漢三才図会』には「鋤⁽¹⁸⁾和名須木^{今云久波}」・「鍬⁽¹⁸⁾和名久須木^{今云久波}」などと記載している。これによると当時は「鋤久波」・「鍬須木」の呼称が用いられていたように感じるが、これは鋤・鍬の呼称名を原典に復するための一動向であつて、その波及的な表われが、前項『倭語類解』にみる鋤⁽¹⁷⁾—くさと⁽²⁾りなのである。第3図は日韓の鍬と鋤の形態の比較を行ったものである。



第3図 (18) (23) 日・韓の農具

「韓国⁽²³⁾の在来農具」

による鋤・鍬の器形は、第3図にみるように、わが国における鋤・鍬と同類形であるが、この傾向が古代以来の継続であれば、わが国の呼称法と共通することになり、鋤から鋤へ、その転訛の原因も探り得られるであろう。

(4) 梯加介波志と梯子の違い

江戸川柳に、「梯子売り抜身と聞いて屋根へ逃げ、柳多留」という句がある。この梯子は、古来「梯波志・加介波志」を名義とされてきたが、近世になって梯子と呼ばれるようになり、やがて正式な名義として定着した。これを表現するための文字としては、梯子・梯・楷・十二子などの字句が散見できる。はしからはしごへの名称変化は表—1によると、

梯木階也(2)—梯^{ハシ}(4)—梯波志(8)—梯加介波之(10)—梯^{カケハシ}(11)—梯^{カケハシ}(14)—梯^{カケハシ}(17)—梯^{イイ}和名加介波志^{今云波志古}(18)—梯^{カケハシ}(20)—梯^{ハシゴ}(21)……梯子（現代）。

となる経緯がみられる。『倭名類聚抄』巻十・「道路具」の項に

「橋^{音高}_{和名波志}水上横木所以渡也…。」

「梯・郭知玄云梯^{音低和名}_{加介波志}木楷所以登高也、唐韻云棧^{音第一音}_{賤訓音同上}板木構陝為道也。」

を記載するが、この註により梯や橋の形態とその用途別は明らかである。

ハシ・カケハシと称されてきた梯は、『倭漢三才図会』には、「今云波志古」⁽¹⁸⁾とみえ、18世紀初頭以前にはハシゴの俗称が付されていたようであるが、正式名称として採用されたのは、さらに遅れることは間違いない。なお梯子の「子」の意は梯の子、すなわち現在様の梯子の横木（くま木とも称される）の名称である。したがって横木を用いない一本棧形式の古代梯を梯子と称することは妥当とは思えない。故に、古代史上の用語としては、「加介波志・波志（梯子）。」のように表記するよう希うのは、筆者一人のみではあるまい。

(5) 砧と搗衣杵について

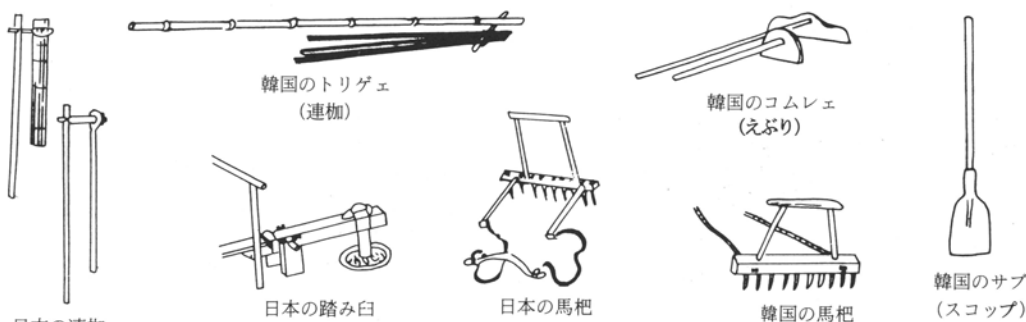
砧・碓^{キヌタ}は衣板の略称である。すなわち布加工途次の用具で、石や木の台及び、それを打つ動作などを総称する意味もある。搗衣杵は、それら打つ槌の呼称である。したがって、槌や、横杵を以って砧と称することはまた問題も生じてくる。表—1による両者の用途は、

碓・碓^{セン}・碓^{チン}(2)—碓・砧加奈支支之石(8)—砧(9)—砧・碓・碓^{和名都知}岐沼以太(10)—砧^{俗云}岐沼太⁽¹³⁾……。

搗作手杵(2)—搗衣杵和名都知(10)—槌きぬたたき(17)—搗衣杵^{俗云之古呂}(18)……。

となる。砧は上記にみる砧^{岐沼以太}_{加奈支支之石}にみられる石製もしくは、板製の台類をさしている。

一方、搗衣杵であるが、『倭名類聚鈔』⁽¹⁷⁾にみえる和名都知は、『説文解字』⁽²⁾の云う手杵と全く同義語である。また『倭語類解』は、「槌—きぬたたき」と註する。さらに『禮雜記』は「砧杵は衣を槌つ具。」としている。したがって杵や槌を以って砧と命名することには大きな疑問も存在しよう。なお『倭漢三才図会』に載る「砧⁽¹⁸⁾俗云之古呂」の、之古呂は以之古呂の誤りであろう。石の和名は「以之」である。石以之古呂を槌の代用とする実状は、古代も現代も変りない。



第4図 日・韓の農具

(6) おわりに

以上により、本稿の主旨とする農具類等名義の発生と、その形成過程の重要性から、名称記載に当っては文献による慎重な時代考証を希う真意は云い得たものと考えている。しかし本稿の内容には不十分な点も多く、今後は本稿末掲載の史料も含めて、さらに考察を深めたいと考えている。

終りになったが、本稿を草するに当っては、群馬県立図書館、大江正行氏、佐藤明人氏、群馬韓国教育院長林炳世先生、細井敏子さん、岩淵フミ子さん方による助言と協力を頂いた。また韓国史料については、釜山市立産業大学博物館及び、釜山市の姜泰植氏の協力に依るところが大であった。

記して謝意を表したい。

註

- (1) 楠山春樹『淮南子』「汜論訓」(『新釈漢文大系55』) 1982。
- (2) 『説文解字』・『玉篇』・『音義』・『正韻』・『集韻』・『釈文』『禮雅記』の諸史料は実見の機会が得られず『康熙字典』縮刷、(1905) 所載によった。
- (3) 竹内照夫『韓非子』(『新釈漢文大系』) 1964。
- (4) 『日本書記上・下』(日本古典文学大系67・68) 1965。
- (5) 『万葉集』巻一(『日本古典文学大系』) 1957
- (6) 杉本つとむ『漢字入門』—『干録字書』とその考察—(1972) に所載する、影印『干録字書』による。
- (7) 塙保己一『新校群書類徒』1, 「神祇部一」(1978) 所載の「皇大神宮儀式帳」によった。
- (8) 同上、21「雑部三」、「新撰字鏡」による。
- (9) 『延喜式』(『新訂増補国史大系』) 1977。
- (10) 正宗敦夫校訂『倭名類聚抄』(元和刊行本) 1974。
天理図書館善叢書2『和名類聚抄』(天理大学出版部) 1971。
- (11) 橘忠兼『伊呂波字類抄』1180は、正宗敦夫編著『伊呂波字類抄』1954刊行による。
- (12) 塙保己一『統群書類従・第一輯 上』1902所載の、「建久三年皇大神宮年中行事」二月十一日「歙山伊賀利神事」の条に、大足、手鋏の記録がみられる。
- (13) 『東国正韻』(韓国、1958) 及び、申叔舟(外) 撰・成元慶編『東国正韻・索引』(韓国・1975) などの所載によった。
- (14) 著者不明『節用集—伊呂波為次第』文明年間(1469~1480) 頃成立の通俗国語字書は、杉本つとむ編早大本『節用集』—本中・研究・索引—。(1975) による。
- (15) 崔世珍『訓蒙字会』(韓国・1527) は、『韓国古典叢書(復元版)』1973による。
- (16) 宋応星著・鐘廣言注釈『天工開物』(中国) 1637成立は、注釈刊本1978によった。
- (17) 著者不明『倭語類解』(朝鮮・17~18世紀) は、京都大学文学部、国語学国文学研究室編1958の刊行本によった。
- (18) 寺島良安『倭漢三才図会』1713。
- (19) 『太平記』二、(『日本古典文学大系35』) 1961。
- (20) 中村平五三『悉皆世話字彙墨寶』1733。
- (21) 越谷吾山『物類称呼』1775。
- (22) 藤堂明保『漢字文化の世界』1982。
- (23) 韓国・国立民族博物館『韓国在来の農具』『国立民族博物館図録』1980。
- (24) 著者不明『類聚名義抄』1187、正宗敦夫校訂『類聚名義抄』1954。
- (25) 呂南詰・金旗圭訳『高句麗の文化』朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所1982、所載。



写真1 カレエ（鋤） 韓国・朝鮮時代
鉄刃装着

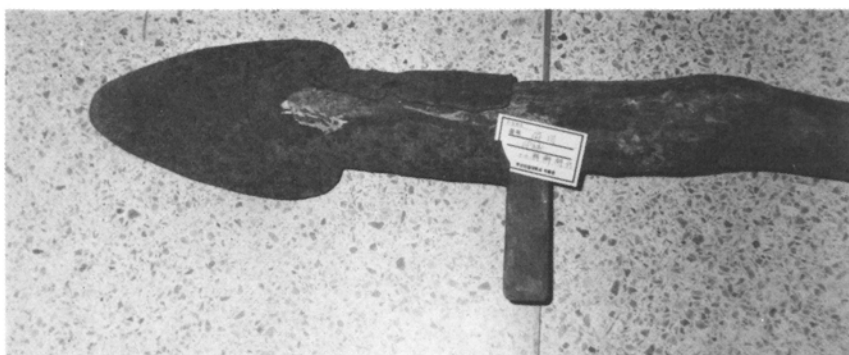


写真2 タピー（手唐鋤）韓国・朝鮮時代
鉄刃の装着状態を背面より見る

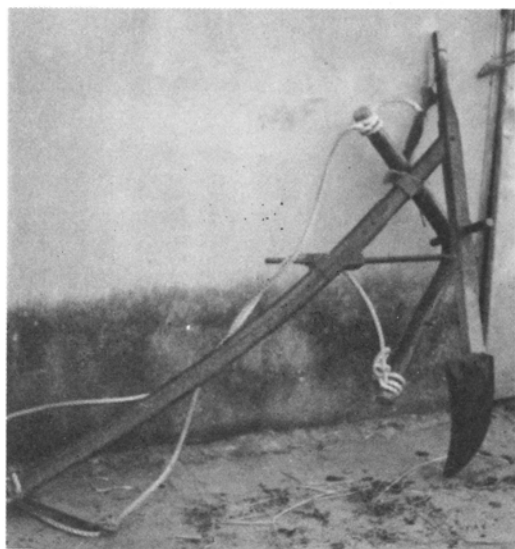


写真3 ジェンギ（犁） 韓国・現代



写真4 タテミترل（砧）
韓国・朝鮮時代